

百年後芸術祭 - 内房総アートフェス -
トークセッション

『アートとツアー』

パネリスト：近藤亮介（美術批評家 / ランドスケープ史）

中崎透（内房総アートフェス参加作家 / 富津エリア）

槇原泰介（内房総アートフェス参加作家 / 木更津エリア）

2024.5.19（日） 13:00-14:30

予約不要・入場無料（定員 50名）

会場：木更津駅東口 インフォメーションセンター 2F

（木更津駅改札を出て右へ進み、左側の階段を降りてすぐ）



見たことのない景色を見る、食べたことのない味に出会う、知らない言葉を聞く・話す…そして住まいに戻る。人間にとって、このようなツアー（旅行）という娯楽はいつ生まれたのでしょうか。内房総アートフェスに参加している中崎透氏（富津エリア）は地域住民の方々へのインタビューを元にしたツアー型の作品を、槇原泰介氏（木更津エリア）は作品の関連イベントとして干潟を歩くツアーを開催している作家です。このトークイベントでは美術批評家の近藤亮介氏をお迎えして旅行・ツアーの起源を参照しつつ、アートとツアーの効果、ツアー形式の作品の共通点や違い、地域との関係性についての話をしていきます。



近藤亮介 | Ryosuke Kondo
（美術批評家 / ランドスケープ史）

1982年大阪市生まれ。美術批評家、キュレーター。ロンドン大学ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン美術学部（Slade School of Fine Art）卒業。東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得満期退学。ハーバード大学デザイン大学院（Graduate School of Design）フルブライト客員研究員、東京大学教養学部助教を経て、現在、東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科非常勤講師。専門は美学芸術学・ランドスケープ史。日英米の芸術・造園の研究を軸に、理論と実践の両面からランドスケープを生活環境として読み解く活動を展開している。編著に『セントラルパークから東京の公園を見てみよう』（東京都公園協会、2023年）、企画・キュレーションに「アーバン山水」（kudan house、2023年）などがある。



中崎透 | Tohru Nakazaki
（内房総アートフェス参加作家 / 富津エリア）

1976年茨城生まれ。美術家。武蔵野美術大学大学院造形研究科博士後期課程満期単位取得退学。現在、茨城県水戸市を拠点に活動。言葉やイメージといった共通認識の中に生じるズレをテーマに自然体でゆるやかな手法を使って、看板をモチーフとした作品をはじめ、パフォーマンス、映像、インスタレーションなど、形式を特定せず制作を展開している。2006年末より「Nadegata Instant Party」を結成し、ユニットとしても活動。2007年末より「遊戯室（中崎透+遠藤水城）」を設立し、運営に携わる（-2021）。2011年よりプロジェクト FUKUSHIMA! に参加、主に美術部門のディレクションを担当。近年の主な展覧会に「越後妻有 大地の芸術祭 2022」（新潟）、個展「FICTION TRAVELAR」水戸芸術館現代美術ギャラリー（茨城）など。



槇原泰介 | Taisuke Makihara
（内房総アートフェス参加作家 / 木更津エリア）

1977年広島県生まれ。美術家。千葉県在住。武蔵野美術大学大学院造形研究科美術専攻油絵コース修了。2009-2011年文化庁新進芸術家海外研修員として渡英。「修復」や「修景」を方法とし、特定の空間や環境そのものを相手として制作している。そのインスタレーションには人工物と自然物の両方が同居し、その場所が自然「的」・人工「的」なものという、不完全で補完し合った関係であることを露にする。2020年に東京湾の干潟を中心としたリサーチを開始し、2022年木更津市に移住。干潟で自然と芸術の関係性を考えるアーティストと研究者によるプロジェクト「Art and Tidal Flats」を立ち上げた。近年の主な展覧会に「都会化された荒野で」（南相木村山荘、2022年）、「アーバン山水」（kudan house、2023年）などがある。